

○西岡 千里¹・吉田 弘司²

(¹比治山大学大学院 現代文化研究科, ²比治山大学 現代文化学部)

中国四国心理学会@愛媛大学

問題と目的

自閉スペクトラム症者（以下 ASD）の感覚の特徴として、感覚過剰反応（感覚過敏）、感覚低反応（感覚鈍麻）、感覚探求の3つがあげられ、DSM-5 から診断基準にもその感覚特性が追加された（高橋・神尾, 2018）。Highly Sensitive Person（以下 HSP）も聴覚・視覚・触覚・嗅覚などに特異な感覚処理感受性を持つとされている（Aron et al., 1997）。このように、両者とも特異な感覚特性を持っているが、具体的な感覚の類似点や相違点を研究したものは少ない。そこで本研究では、HSP 傾向者と ASD 傾向者の感覚特性を、感覚プロフィール（sensory profile, 以下 SP）を用いて検討した。

方法

参加者

学部・大学院生 100 名が参加した（有効回答数 89）。

手続き

質問紙による調査を行った。HSP 傾向は、Aron & Aron(1997)が作成し、高橋(2016)が日本語訳した Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) の 19 項目を用いた。ASD 傾向には、若林・東條(2004)が日本語版の標準化を行った AQ 指数を用いた。感覚特性の評価については、Brown & Dunn(2002)が作成した日本版青年・成人感覚プロフィール (SP) を用いた。SP は、低登録、感覚探求、感覚過敏、感覚回避の 4 象限によって感覚処理のパターンが説明されるものである。

倫理的配慮 本研究は、比治山大学倫理審査委員会による倫理審査を受けて承認のうえ実施された（申請番号 2211）。

結果

HSP 傾向と ASD 傾向の相関関係

HSP 傾向と ASD 傾向の間には比較的弱い正の相関が認められた($r = .297$)。

HSP 傾向・ASD 傾向と感覚特性 (SP) との関連

HSP 傾向も ASD 傾向も、SP の感覚過敏、感覚回避、低登録と有意な正の相関を示していた (Table 1)。

感覚特性 (SP) 間の相関関係

感覚過敏と感覚回避の間に有意な正の相関がみられただけでなく、これらの感覚特性はどちらも感覚の鈍さを意味する低登録と有意な正の相関を示していた。

クラスター分析を用いた参加者の分類

HSP 合計と AQ 合計を除く全変数を用いてクラスター分析 (Ward 法) で参加者を分類したところ、参加者は 4 つの群に別れた (I 群: 14 名, II 群: 28 名, III 群: 23 名, IV 群: 24 名)。これらの群の HSP 傾向と ASD 傾向を 1 要因分散分析によって調べたところ、どちらも群の主効果が有意で、HSP 傾向 (Figure 2: $F(3,85) = 20.81, p < .000, \eta^2 = .423$) は III \approx I > II \approx IV の順となり、ASD 傾向 (Figure 3: $F(3,85) = 7.77, p < .000, \eta^2 = .215$) は III \approx II > IV の順 (I は II と IV の中間) となることがわかった。

Figure 1 各群の HSP 傾向

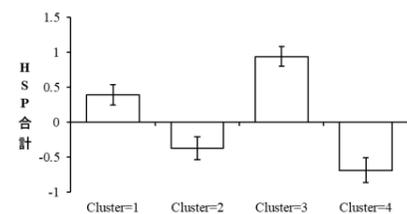
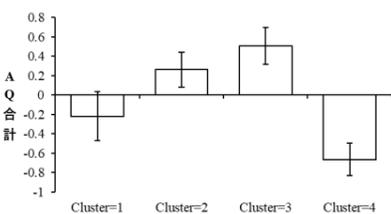


Figure 2 各群の ASD 傾向



さらに、これら 4 群の感覚特性を調べたところ、感覚過敏 (Figure 4: $F(3,85) = 59.79, p < .000, \eta^2 = .678$) は III > II \approx I > IV, 感覚回避 (Figure 5: $F(3,85) = 17.64, p < .000, \eta^2 = .384$) は III > II > IV (I は II と IV の中間), 低登録 (Figure 6: $F(3,85) = 43.32, p < .000, \eta^2 = .605$) は III \approx II > IV \approx I, 感覚探求 (Figure 7: $F(3,85) = 9.44, p < .000, \eta^2 = .250$) は IV \approx III > II \approx I の順であった。

AQ 下位尺度を検討したところ、コミュニケーションの問題は III \approx II > IV \approx I の順、注意の切り替えの問題は III > I \approx IV の順 (II は III と I の間)、細部への注意は有意な主効果なし、ソーシャルスキルの問題は II > IV の順 (III と I はその間)、想像力の問題は II > IV の順 (III と I はその間) となっていた (Figure 8)。

Figure 4 各群の感覚過敏傾向

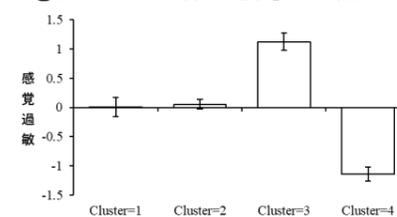


Figure 5 各群の感覚回避傾向

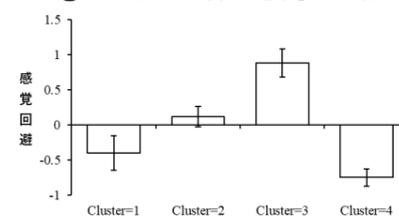


Figure 6 各群の低登録傾向

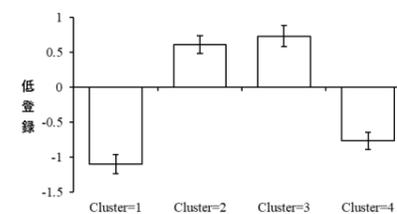


Figure 7 各群の感覚探求傾向

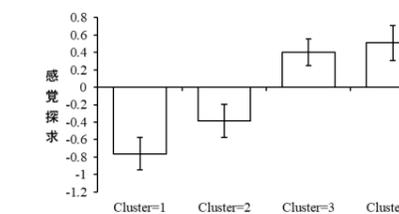


Figure 8 4群のAQ下位尺度の傾向

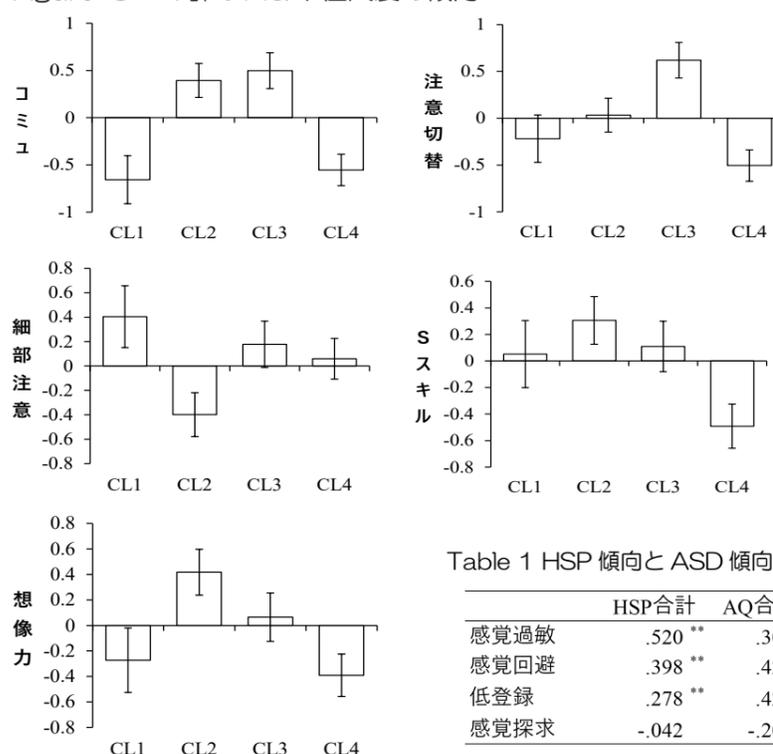


Table 1 HSP 傾向と ASD 傾向の感覚特性

	HSP合計	AQ合計
感覚過敏	.520 **	.305 **
感覚回避	.398 **	.423 **
低登録	.278 **	.427 **
感覚探求	-.042	-.202 +

考察

本研究の結果、HSP 傾向と ASD 傾向の間には比較的弱い正の相関 ($r = .297$) がみられた。また、どちらの傾向も、感覚過敏、感覚回避、低登録という感覚特性と有意な正の相関をもっていた。また、これらの感覚特性の間では、感覚過敏と感覚回避の間に正の相関がみられただけでなく、両者ともに感覚の鈍さを示す低登録とも正の相関を示すことがわかった。このことから、感覚が敏感で強い刺激を避けて生活する傾向のある者は、過敏さと同時に鈍感さを併せもつことがわかった。

クラスター分析の結果から、HSP 傾向の強い群として I 群と III 群が分類された。このうち III 群は、感覚の過敏と鈍麻、回避と探求を併せもっていたが、彼らはコミュニケーションを苦手とし、注意の切り替えが困難であるという ASD 傾向を示した。それに対して、I 群は特異な感覚特性も ASD 傾向も示さなかった。

これらのことから、HSP 傾向者には、異なる感覚特性をもつ人々が含まれており、特殊な感覚特性をもつ者が ASD 傾向も示すことがわかった。

引用文献

- Aron, E. N., & Aron, A. (1997). Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 345-368.
- Brown, C., & Dunn, W. (2002). *Adolescent/Adult Sensory Profile: User's Manual*. San Antonio: Psychological Corporation.
- 高橋 亜希 (2016). Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) の作成 感情心理学研究, 23, 68-77.
- 高橋 秀俊・神尾 陽子 (2018). 自閉スペクトラム症の感覚の特徴, 精神神経学雑誌, 120, 369-383.
- 若林 明雄・東條 吉邦 (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討— 心理学研究, 75, 78-84.